FUTUER EVENT

●ブランチ企画展

～ヤマムラアニメーション図鑑～
『頭山（あたまやま）』原画展

名古屋出身：山村浩二
第75回米国アカデミー賞短編アニメーション部門ノミネート
アヌシー国際アニメーションフェスティバル2003（仏）グランプリ受賞

アート&デザインセンターでは、活動発信の場を大学内ギャラリーだけに留まらず、柔軟な企画機能を目指します。
このたび、名古屋出身のアニメーション作家山村浩二氏を迎え、代表作『頭山』の原画を中心とした展覧会を開催します。
会場となるのは、名古屋市の繁華街にあるギャラリーです。この場所は、本学造形科が中心となって運営する自主スペースで、本企画は「アート&デザインセンター」が夏休みにひろく一般のみなさんに提供する初の“ブランチ企画”となります。

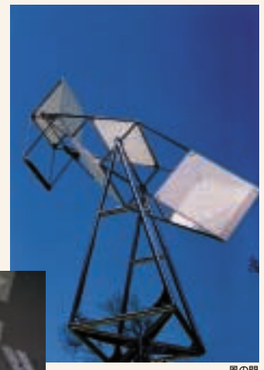
開　催　日　2003年8月22日（金）➔9月9日（火）
12:00➔19:00（水曜・木曜休廊）
会　　場　名古屋芸術大学アートスペース T.A.G. IZUTO（タグ・イズトウ）
名古屋市中区錦3丁目13-33 いづとうビル2階（旧いづ藤ギャラリー）
主　　催　名古屋芸術大学アート&デザインセンター
協　　力　名古屋シネマテーク、スローラーナー
協　　賛　アサヒビール
後　　援　朝日新聞社　名古屋テレビ
お問い合わせ　名古屋芸術大学美術学部
TEL 0568-24-0325（代表）
FAX 0568-24-0326

●秋の企画展

新宮　晋展

会　　場：名古屋芸術大学アート&デザインセンター
会　　期：2003年10月7日（火）➔ 11月4日（火）
開館時間：12:00 ➔ 18:00（日曜・祝日休館）

秋の企画展では、風のエネルギーや水の流れる力によって動く作品などで知られる新宮晋の展覧会を開催します。1960年代の半ば頃から、風で動く作品を作りつづけている新宮晋の作品は、銀座エルメスのモニュメント、関西国際空港ロビーのモニュメントなどをはじめ、各地の美術館の庭、あるいは駅前広場や公園に設置されており、どこかで作品を目にしているひとも多いでしょう。本展では、風で動く造形作品を中心に、スケッチや写真などとともに展示します。


風の門

雲

新宮　晋
1937年生まれ。風で動く彫刻の第一人者として世界的に有名。舞台の演出や絵本制作など活動は多彩。2000年から続けている『wind caravan』の活動で、昨年紫綬褒章を受賞。

EXHIBITION 7→10月　アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

絵画とイラストレーションの関係展　松本圭以子とマツモトヨーコ	7月18日（金）～ 7月31日（木）	BE+be
夏期休館	8月 1日（金）～ 9月 4日（木）	
prints hormone ～次代の版画～	9月 5日（金）～ 9月11日（木）	BE+be他
バイチクリ present's「カレンダーってのは？展」	9月12日（金）～ 9月18日（木）	BE
「ソフトスカルプチャーへ」展（仮称）	9月24日（水）～10月 2日（木）	BE+be他
秋の企画展「新宮 晋展」	10月 7日（火）～11月 4日（火）	BE+be

Open 12:00－18:00（最終日は17:00まで）日曜・祝祭日休館　　【入場無料】どなたでもご覧いただけます。

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町　tel.0568-24-0325　fax.0568-24-0326

交通のご利用
●最寄りの交通機関をご利用の場合名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。
※急行電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください。西春駅から北西2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります。
●自動車ご利用の場合
一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。名古屋空港から10分

Steering committee
MEMBER
H15年度 アート&デザインセンター運営委員会メンバー

センター長　神戸　峰男
委員長　高橋　綾子
副委員長　藤松　由美
　　津田　佳紀
委　　員　岩井　義尚
　　須田　真弘
　　池側　隆之

A&Dセンター　江坂恵里子

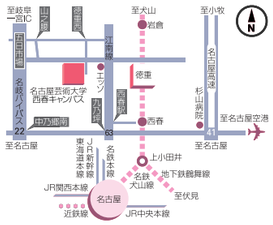
○ 編集後記

国際交流とは、先ず自国の歴史・文化を知ることではないかと思います。例えば、言語によるコミュニケーションは大切ですが、どんな外国語を学ぶにしても母国語の能力が問われます。ただ、西春キャンパスの留学生と学生の交流を見ていると、無理のない自然な交流が育まれているのは、それぞれが何かを創る環境に在るということが大きな理由かも知れません。（江坂）

B!e　Vol.2
発 行 日　2003年7月25日
編集・発行　名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535　愛知県西春日井郡西春町
Tel. 0568-24-3025　Fax. 0568-24-3026
URL　http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人（サンメッセ株式会社）
印　　刷　サンメッセ株式会社

2003　Printed in Japan

© Nagoya University of Arts, Art & Design Center



NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

SUMMER.2003 Vol.2
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 International Exchange　『国際交流ってなんだ』

現代は、"国際化"の時代と言われます。全国各地の大学では、様々な国や地域からたくさんの人々が集まり、活発に交流しています。私たちはこうした自然な触れ合いの中で互いの異なる文化の背景を知り、自分たちの歴史や文化、生活を見つめ直しています。

本号では、名古屋芸大に交換留学生あるいは交換教授として滞在している方々にスポットを当ててみました。彼等はそれぞれ私たちとは異なる文化や歴史の中で育ちました。時に厳しい批判者であり、また暖かい助言者でもある彼等のメッセージを私たちが受けとめ、将来の力としていけば国際交流にそれだけの価値があるのだと思います。

アート&デザインセンターでは、毎年2回、留学生による展覧会を開催しています。芸術表現を通した交感の場としたいのです。

2年前に姉妹校提携をした新彊芸術学院から本学造形コース助教授として滞在中のディリムラティさん。4月に来日されて3ヶ月余り、名古屋芸大の印象を聞いてみました。

Dilimrati Turdi
from 新彊芸術学院（China）

『素材の豊富さ・施設が充実している』というのが第一印象。ディリムラティさんが教鞭をとる新彊ウィグル自治区は、中国でも面積が一番大きな省区で、人口1700万、13の少数民族が暮らしています。1000年もの長い間、芸術活動が眠っており、50年程前から少しずつ復活したそうです。新彊芸術学院も創立46年、彫塑は、まだ10年しか経っていません。そんな中で、本学に滞在し、素材の豊かさとその広がり、学生が設備の整った中でのびのびと制作している様子がとても勉強になると語ってくれました。学生たちとの授業では、実技を見せることによって理解してもらえることが多く、言葉の問題は、思ったより困らなかったそうです。7月の帰国後は、日本の"今"を学生たちに伝えてくれることでしょう。

特集 International Exchange

『Messages』

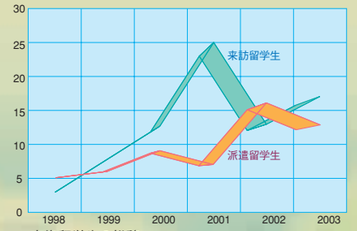
本学とは交流が深いブライトン大学から留学中のウェンディさん。メタルワークを学んでいます。

Wendy Daws
from Brighton University（UK）

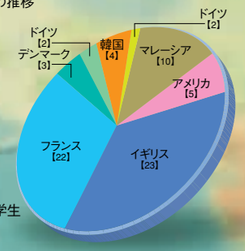
来日前の日本のイメージは、『まるで違う星のよう』。それほど遠い国だと思っていました。実際に暮らしてみて感じるのは、とてもフレンドリーなこと、素晴らしいもてなしをしてくれることです。最初は何もかも驚きの連続でしたが、宿舎の近くで買い物をしていても、街の人が名芸大の留学生を快く受け入れていて、自然に声をかけてくれたりするのが嬉しかったです。この数カ月、たくさんの出会いがありました。そして日本の伝統工芸の技術の高さには本当に感動しました。信じられないような技術です。そして、何十年も何百年も道具を大切に使い続けていく・・素晴らしいですね。

異文化理解をアシスト
本学国際交流センター　鈴木 信隆

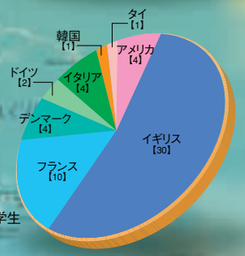
ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて、地球の端から端まで自由に行き交うグローバライゼーションの時代、人は誰も異文化に接することを避けて通ることはできません。そして、異文化に接すれば、大なり小なりカルチャーショックを受けることでしょう。そういった場合にアシストをしていくのが国際交流センターの役割だと考えています。交換留学生においては、受入れ側である本校はもちろん、派遣先である相手校において、学生が気持ちよく過ごせるよう、また創作活動をしやすい環境をつくっていくよう折衝しています。



交換留学生の推移
【1998-2003】



国別来訪留学生
【1998-2003】

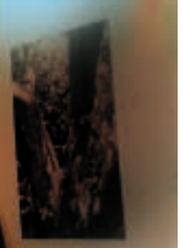


国別派遣留学生
【1998-2003】

Ady Griffiths

国際交流　こぼれ話

本学に留学中のクレマン・グロさんの弟フェリシアンさん（写真）が、お兄さんを訪ねてフランスから来日しました。グロ兄弟はともにオーストラリアの楽器"ディジュリドゥ"（アボリジニの楽器で笛の一種）の名手なのですが、たまたま日本ディジュリドゥ演奏コンクールに出場したところ、全国大会まで進み、優勝してしまったそうです。旅の友として持参した楽器が思わぬところで新たな出会いを生み出してくれたようです。


Georg Schmalhofer

トピックス TOPICS レポート

深澤直人ワークショップ "ファウンド オブジェクト"

2003年5月24日　名古屋芸術大学
2003年5月31日　ナディアパーク デザインセンタービル6F プレゼンテーションルーム

春の企画展『WITHOUT THOUGHT1999-2003特別展』に合わせて二週連続で深澤直人ワークショップが開催された。参加者は、デザイン学部の学生30名と本学OBのデザイナー10名、企業よりインハウスデザイナー10名合計50名。第一週のPART1では、"ファウンド オブジェクト"という考え方の説明に続き、フルーツゼリーを2人1組になり、パッケージの開けはじめから、食べ終わるまでを観察して、『どれだけの事を気づくか?』を競い、その問題点から「あたらしいフルーツゼリーのパッケージデザイン」の制作と発表へ、最後に翌週のPART2へのファウンド オブジェクト課題「スプーン」が発表され、一週間でプロトタイプの制作が課せられた。
ワークショップPART2では、場所を国際デザインセンターに移し、見学者を含めた60名が参加し、"ファウンド オブジェクト"の考え方の復習から、参加者の課題作品を発表、深澤氏から一人一人丁寧に講評され、数点は高い評価を受けた。終わりに深澤氏のデザイン活動をスライドで振返り、改めて『デザインする』ということはどういうことなのかを考えた参加者も多かったのではないだろうか。参加者は深澤氏のデザイン思想をエネルギーに、さらなるステップアップを目指してくれるであろう。

デザイン学部長　和田義行

80cm四方のギャラリー

2003年5月1日～5月31日
IB Cube Gallery／一宮

「GALLERY」という言葉には様々な意味がある。この一宮市の街角に出現した小さな空間もその一つです。わずか80cm四方のガラスの空間に作品を展示し、この空間が世界の地域に点在するという、そんな小さなスペースでも実は壮大な計画です。そして展示された作品は別の他国のCUBEギャラリーへ最低限のコストにて輸送されていきます。ギャラリーの管理人!?でもあるアーティストの松本幹永氏（名芸大OB）によれば、きっかけはデンマークでの滞在時に出会った情熱的なアーティストとの会話の中から盛り上がってしまったとの事。現在の所まだ2カ国で名前の由来もその街のIchinomiyaとBovlingbjergからとられたものですが、この企画が軌道に乗れば、他にも参加地をつのり、例えばカナダのモントリオールで出現すればギャラリー名も「IBM Cube Gallery」と変化するそうです。5月のこけら落としでは、本学非常勤講師でもある加藤万也氏の作品が展示され、その後デンマークでの展示作品との交換が行われています。少しずつ世界に小さな「GALLERY」空間が作品と共に「移動・出現・増殖」するのもユニークな試みです。

URL http://www.ib-cube-gallery.info/　　美術学部　洋画コース　須田真弘

シャヒード、100の命 ーパレスチナで生きて死ぬことー

最初にこの展覧会について聞いた時、ワシントンDCの「ホロコースト・メモリアル・ミュージアム」を見学した時のことを思い出した。私の友人が企画に関わっているこの展覧会は、パレスティナのインティファーダで犠牲となった最初の100人の肖像写真と、それぞれ1点だけ選び出された遺品から構成されている。構造自体は「ホロコースト・メモリアル・ミュージアム」と似ているが、被害者が加害者に入れ替わっているということだけが歴史の皮肉である。シャヒード"shaheed"「殉教者」には、遡れば "faithful witness" 「誠実な証人」の意味があるという。生きている私たちが「誠実な証人」になるには、どうすればいいのだろうか?　展覧会は東京、京都、沖縄、松本、大阪を巡回する。詳しくは http://www.shaheed.jp/ を参照してほしい。また、同時企画として広河隆一氏、針生一郎氏、鵜飼哲氏、岡崎乾二郎氏らによる連続シンポジウムも開催する。

デザイン学部　造形実験コース　津田佳紀

RELAY ESSAY

サント・コロンブのこと

中村 卓史

ルイ14世の時代にサント・コロンブというヴィオル*奏者がいたのを知ったのは、1976年のW. クイケンとJ. サヴァルの「2本の同じヴィオルのためのコンセール」というレコードでだった。サント・コロンブの弟子マラン・マレの、ティトン・デュ・ティエによる逸話も有名だった。その後、フランス国内で好評を博した1991年のP. キニャール原作A. コルノー監督の映画「めぐり逢う朝（邦題）」はサント・コロンブとマレの確執を描いたものだ。その公開直後に、サント・コロンブはリヨン在住のオーギュスタン・ドトルクールであるという論文がル・モンド紙に掲載され、その後オーギュスタン・ダンドリクールというのが実名であるとされた。1993年には「サント・コロンブことオーギュスタン・ドトルクール」と銘打ったCDも発売された。しかし、J. ダンフォードの画期的な論文で、サント・コロンブはパリ在住のジャン・ド・サント・コロンブのことであり、私生の息子もいてエディンバラで活躍した等々を知ったのは、1999年のフランスヴィオル協会の機関誌によってだった。そして2003年の今、J. サヴァルによって、父親に勝るとも劣らない息子の美しい音楽さえもCDによって聴くことができるのは、とてもうれしいことである。

美術学部教養部会　フランス語・異文化入門担当

*ヴィオル
4弦のヴァイオリン族に似たフレット付きの6弦楽器。17世紀から18世紀にかけてフランスでは特に独奏楽器としてバス・ヴィオルが好まれた。サント・コロンブが7弦のバス・ヴィオルを創始したとされる。18世紀半ばにはフランスでもヴァイオリン族に駆逐されたが、そのことをH.ルブランは1740年の「ヴィオルの擁護」で慨嘆している。